

国際交流事後活動ニュース

MACRO COSM

◎特集 国際青年育成交流事業

●レポート ラオスから森がなくなったら……

マクロコズム '95.1



財青少年国際交流推進センター

vol. 2

国際青年育成交流事業（青年海外派遣）



ジョルダン
タイ
トンガ
イギリス
タンザニア

▲
青年海外派遣団壮行会にて。
出発を直前にして緊張も新たな団員と歓
談する山口鶴男総務庁長官。

タンザニア▶
ドドマ市のゴゴ族の村でダンスを見せて
もらった後、村人とともに。
「Hapa hapa Tanzania（ここは、タンザ
ニアなのさ。）」を実感する。



皇太子殿下の御成婚を記念して、平成6年度から新たに開始された事業であり、昭和34年度に当時皇太子殿下であられた天皇陛下の御成婚を記念して開始された「青年海外派遣事業」及び昭和37年度に開始された「外国青年招へい事業」を継承・発展したものです。今年度は、左記の5か国に派遣され、拠点滞在型による共同体験交流活動（国際協力活動やボランティア活動等）を中心とした密度の濃い国際交流活動を行っています。

今号では、新事業の成果を、団員からの写真とレポートの特集でお届けいたします。



ホームステイ先での朝、托鉢僧への食物の寄進をする。 ▲
差し上げ方がわからないので、お母さんの真似をして初体験。

— タ イ —

コンケン市内からバスで1時間、さらにトラックで30分。
ホームステイをしたファファ村にて早苗取りの作業を手伝う。
慣れない仕事に「オットット！」▼





▲ジョルダン

青年海外協力隊員とともに、Karak で開催した Japan Festival で空手を披露する団員。



▲トンガ

Japan-Tonga Festival にて、子供達に好きな絵を描いてもらう。



▲イギリス北部

アバディーン郊外のゴードン・アームズ・ホテルで、地元の人達と夜の楽しい交流のひとつ。



◀イギリス南部

ハンプシャー地区の老人施設を訪問する。部屋の内装も明るく清潔で、平均年齢 90 歳以上という老人たちの表情も生き生きとしていた。若いメンバーの訪問を歓迎してくれるのは、どこの国も同じ。

国際青年育成交流事業（青年海外派遣）

ジョルダン

（アンマンーマダバ－死海－ジェラシーイルビット－
ペトラ－アカバ－ワディラム）

その日の糧を手に入れる方法

山下かおり

旅行者がどのように食料を得るか、その方法を見ればその場所での滞在期間がわかるという。

アンマンに着いたその夜、ホテルのレストランでの最初の食事。アラブ料理に胸をときめかしながらメニューを覗きこむ我々にボーイさんの声。「お飲み物は？ビール？」「えー。イスラム教の国で酒が飲めるとは思わなかった。」そう、実はお酒も簡単に手に入るのだ。初めてのシシカバブはちょっとしょっぱく、アラビックコーヒーの苦さに泣いたメンバーもあり、変な日本人様ご一行のジョルダン第一夜はにぎやかにふけていった。しかし、翌日から、どのように食料を手に入れるか、各自がその能力を問われることになった。アラビア語しか通じない地元っ子人気の店に挑戦する人。ケンタッキーをみつけて安心する人、様々

である。喫茶店に入ってみたら男性しかいなくてびっくり。ジョルダンではチキンがおいしい。コーラと言えば、必ずペプシが出てくる。

最終的に団員に最も愛されたのは「セーフウェイ」という巨大なスーパーだった。ミネラルウォーターを買い、一巡して、最後は売店でシャウルマを買うのが定番コースとなった。羊肉を何層にも重ねてあぶった物を削りトマトなどと一緒にパンにまくのだが、これがまた、最高の味。

一カ月間の滞在で、行く先々で砂糖たっぷりの紅茶とオリーブ油いっぱいのアラブ料理のもてなしを受け、身も心も肥えたジョルダン団であった。人々のやさしさとともに、あのシャウルマの味が忘れられない……。



アンマン郊外バカア難民キャンプで
パレスチナ難民と話しをする青年

主な内容

国際青年育成交流事業（派遣）……………5～8	IYEO たより（沖縄）……………18
ラオスから森がなくなったら……………9～11	世界の国際交流活動（AIESEC）……………19
国際交流の在り方について……………12～15 （猪口邦子氏の講演より）	お知らせコーナー……………20
各地の活動紹介（宮城）……………16～17	インドネシア派遣（沖縄）……………21
	第1回東アジア青年指導者会議……………22

〈表紙の説明〉

インドネシア・13才の
Fifi Sumarwati P. さんの
「私の夢」
アジアのこども絵画展より
入賞作品

タイ

(バンコクーコンケンーチェンマイーパタヤ)

田舎でのホームステイ

佐々木雅子

タイ滞在1週間がたって、東北地方の主要都市コンケンへ行っただ。ここではホームステイが入っていたが、宿泊する村は市内からバスで1時間半程行った郡部にあった。まず郡役場で郡長の出迎えを受けた後、小雨の降る中、バスからピックアップされてトラックに乗り換えた。

私たちは重なり合うように荷台に乗り込んでいた。まさに水牛の活躍する典型的な農村の風景を見ながら、タイ語のできる副団長の2人以外は皆非常に不安な気持ちと少しの期待が入り交じった微妙な表情をしていた。事前に言われてはいたが、こんな田舎まで来ると英語はもう通じないというのが一目瞭然だった。

30分程行くと一つの集落に着いた。そこがステイ先のフアファイ村だった。

まず村の中心のお寺で歓迎会があった。ホストファミリーと対面した後、私たちはバナナの葉や花でつくられたお供えの回りに座り、白い糸を持つように言われ、白い衣をまとった村の年配の方に私たちの安全と幸福を祈るお経を唱えていただいた。その後、お経が続く中、村人の一人一人が幸福を祈りながら、私たちの手首に白い糸を結んでくれた。これは本当に歓迎してくれているということを実感する感動的な式だった。

その後、皆で食事をし、それからそれぞれの家へ分かれて行った。各家庭では、ほとんど英語が



通じないながらも、気持ちは十分通じ合い、それぞれが温かい気持ちを感じることができた。俄仕込みのタイ語で話し、言葉が通じないのはとてもまどろっこしいことだけれども、あきらめずに理解してもらおうとするところに交流の意味があると感じるホームステイだったようだ。

トンガ

(エウア島ーヌカロファーバンガイアモツ島ーハアバイ諸島ー)
ハバウ諸島

Tonga Time

木村亜紀子

トンガで何よりも痛感させられたのは、トンガと日本との時間感覚のズレだ。私たちがトンガ王国に到着したのは夜中の2時。だが次の日は予定が詰まっているので、朝6時半にはホテルを出たいという。全団員、げっそりした顔で時間どおりにロビーに集まったが、待てど暮らせど迎えのバスは来ない。40分近く遅れてやっとバス登場。思えば出発前日になって突然ニュージーランド→トンガの飛行機がキャンセルになったり、行く末不安な思いが渦巻くなか、皆それなりの覚悟はしていたのだったが、やはりというか、改めてこれ

からここで3週間を過ごすのだという心構えを持ち直した。また、私自身にもこんなことがあった。プリンスの昼食会に招いていただき、各ホストファミリーの家に迎えの車が回ってくるのお話だった。だが、当日の約束の時間を1時間過ぎても、何の音沙汰もない。しかし、その頃までにはだいぶ経験を積んで来ていたので、「いつものことさ。」と思い、子供たちとのんびり遊んでいた。けれども2時間経っても迎えが来ない。いくらなんでもこれはおかしいと思い、ホテルに戻ってみると、迎えに来てくれるはずだった方から電話があり、「あなただけいつまでたっても来ないからみんな心配していたのよ。」と言う。パレスに向かう車の中、私は無言で唇を噛みしめていたが、到着して他の団員たちの顔を見た途端に涙が止まらなくなってしまった。

いろいろな事件があったが、今では“TONGA TIME”が懐かしい。「トンガでは人は時間に支配されない。人が時間を支配するのだ。」と誇らしげに語ったトンガ人たちを、いつまでもそうあってほしいと強く願う今日この頃である。



農業祭にて、国王の前でトンガダンスを踊る生徒

イギリス（南部）

(ロンドンーウィックカムーニューフォレストーサウサン)
(プトンーウィンチェスターーソールスベリーーブライ)
トンーワイト島ーポーツマス

感動した出来事

佐藤 紀子

私はハンプシャー地区の老人施設を見学する機会に恵まれた。その時の印象を述べてみたい。

利用者は、平均年齢が90才以上の独居老人達であった。状態の軽い人が多く、日中はベッドをはなれ、居間で皆とともに過ごすのが日課のようだった。居間、食堂等は広く、ゆったりとしていた。また、部屋の内装があかるく、施設というよりは個人の部屋という感じであった。職員の方々も老人たちも表情が明るいのが印象的であった。

日本だと、老人＝寝たきり状態というイメージがある。実際は、寝たきり状態にさせられてしまう場合が、殆どである。その数は、欧米の5倍にもなるという。

文化の違いなどはあるにせよ、施設内の雰囲気、日中は起坐位で過ごすこと等、見習わなければならぬと思った。

イギリス（北部）

(ロンドンーエディンバラーアバディーーンーバラッター)
フレザバラ

スコットランドの小学校で

村上さやか

スコットランドのある公立小学校を訪問した時のことである。その小学校の階段には全て、蛍光色のテープで縁取りがしてあった。不思議に思っ

て尋ねたところ、この学校には盲目ではないけれど目の弱い女の子が一人いて、去年は彼女のクラスが2階になったので、彼女が安全に階段を上り下りできるようにテープを貼ったということだった。たった一人の子供のために全校中の階段にテープが貼られたのである。また、あるクラスではたった3人の子供が一人の先生について勉強していた。それは少し覚えの遅い子供たちのためのクラスで、それぞれの子供の能力に応じて指導しているとのことだった。集団の中にあっても個人を大切にすゝるイギリス教育のきめの細かさ、懐の深さを感じずにはいられなかった。



タンザニア

(ダルエスサラームーモロゴロードドマーザンジバルー)
モシーアルーシャ

楽しんだロスタイム？

気賀沢千代

タンザニアでの地を踏んでから3日目、私たちは思いがけない出来事により、「Hapa hapa, Tanzania (ここはタンザニアなのさ)」ということを実感した。

我々タンザニア団は、政治・経済の中心であるダルエスサラームを後にし、そこから内陸方面に492km離れた首都、ドドマに向かった。ドドマは

建設中の国会議事堂の屋根の上で(ドドマ市)



1973年に遷都が決定した後も、その開発は遅々として進まず、現在に至っても未だに首都機能を果たせていない。我々にとってはタンザニアに着いて以来、初のバスによる大移動であり、各々が期待に胸ふくらませての出発であった。しかし、バスは出発後、ものの1時間の地点で止まってしまった。ファンベルトが切れたということで、私たちは完全に足止めをくらったのだ。タンザニア人であるドライバーは、出発前に点検をするでもなく、予備を積むでもなく、偶然にも通りかかった彼の会社の車に乗って、ファンベルトを調達にダルエスサラームまで戻るといったのだ。いささか呆れた感もあったが、ただ、動かぬバスと一緒に彼の後ろ姿を見送るばかりだった。それからバスが再び動きだすまでの4時間、我々はそれぞれに楽しんで時を過ごした。バスの上に登ってハーモニカにあわせて大声で歌を歌いだす者もいれば、木陰でトランプをしたり、近くの村の子供を集めて手品に勤しむ者もいた。電話などの通信機能が発達し、車両部品も充実している日本に於いては、この4時間は大変な時間のロスの様に感じられたかもしれない。しかし、私たちは何もないタンザニアの地で、この4時間をこの上なく楽しんだ。そして何よりも、この時、自分たちがタンザニアにいることを実感していた。

ラオスから森がなくなったら……

JVC ラオス現地代表 松本 悟
(第11回東南アジア青年の船参加青年)

アセアンからインドシナへ

第11回東南アジア青年の船に乗ってから今年でちょうど10年。その間に大学を卒業し記者としてNHKに勤めたが、結婚を機に夫婦で一緒に人生を歩もうと忙しい記者を辞めた。運命の巡り合わせで8年ぶりにタイに来たのが92年4月。同年の7月からはラオスに住みNGO活動に加わっている。個人的に色々あった10年だが、この間インドシナも大きく変わった。ビザの取得がきわめて難しかったベトナム、カンボジア、ラオスは各々形を異にしているとは言え、対外開放の速度を速めている。経済制裁解除で市場として注目を集めているベトナム。新政権誕生によって一挙に外国企業が雪崩込んだカンボジア。その中であってラオスだけは今も日本人にはあまり馴染みがない。しかし、ベトナムと共に今やアセアン(東南アジア諸国連合)のオブザーバーに名を連ねている国である。

日本の本州ほどの国土に、静岡県よりやや多い430万人の人口を抱えている。1人当たりの国民所得は250ドルに満たない。数字の上では世界の最貧国に数えられる。ところが当のラオス人に聞くと「カンボジアは物騒な国だから行きたくない」「バングラデッシュに行ったが、何て貧しい国なんだと思った」「タイ料理は化学調味料の味が強くて食べる気がしない」などなど。

とどの詰まりが「やっぱりラオスがいい」と言うわけだ。

貧しくても豊かな国

ラオスには飢えがない。去年の収穫は米どころの南部で前年作の半分程度だった。確かに栄養失調から伝染病にかかって死亡するケースも報告されたが、飢餓は起きなかった。「これがエチオピアやソマリアだったら大規模な飢饉になって大騒ぎだったろうね。」緊急救援にあたった世界食料計画(WFP)の弁である。なぜ飢えなかったのか? WFPのスタッフはタイの英字新聞の取材

松脂を探っているところ。これを売って塩や服を買う。もちろん木は死なない。



にこう答えている。「森との生活が残っているから。米不足の村人は例年以上に森にはいり、小動物や野草、筍などを採って生活の糧にしている。」食べていけるから、農民は都市に流れ込まないしスラムがないのだ。経済苦を原因にした少女売春もほとんど聞かない。ある村人は、こんなことを言っていた。「森は、ラオスの村人にとって金のいらぬスーパーマーケットだ。」金のいらぬ森に、人口の9割にあたる農村の人が依存している国である。現金経済を前提にした国民所得が低いのは当然だろう。それは貧しさのシンボルでは無い。むしろ豊かな森との生活が残っている証なのである。

／ 先の見えないダム建設 ／

そんなラオスの森の将来に暗い影を落とす動きが、今活発になっている。確かに、これまでも政府の移住政策や村人の不法伐採、無秩序な焼き畑などが森林破壊の原因として指摘されてきた。しかし、それとは比較にならない大きな影が忍び寄っている。水力発電ダム建設の乱計画だ。現在

机上では、60近い計画があり、うち18件については、実現に向けて動きだしている。目的は、隣国タイやベトナムへ送電線を引いて電力を輸出しようというのである。

この10年のタイ経済の変化は目ざましい。バンコクだけでなく、今や地方都市にも工業団地が建設され、経済成長優先の国作りが進んでいる。その発展の速度に大きな障害となっているのが電力不足である。この解消のために、昨年6月ラオスとタイの両国政府の間で西暦2千年までに1,500MW(150万kW)分の電力を供給することが合意された。現在のラオスの発電能力は、わずか200MW。その7倍以上である。

計画中の一つ、ラオス中部のナムウィン第2水力発電ダム。完成すれば600MWの能力がある。水没面積は3万6千ヘクタール、うち森林は約百万立法メートル。3千人の村人の生活が失われることになる。ダムの建設に先立って昨年からの伐採が始まった。「国の決めたことだから文句は言えないが、森が無くなったら生活できない。」とある村の村長はうなだれていた。「外貨で国が潤うのだから……」決まってそういう声が聞こえてく

—— ラオスの味 ——

* 魚団子と野菜の煮込み

(ロック チン バートム パック)

魚のすり身で作った団子と野菜を、米を加えたスープで煮る。味付けに使うプララーは、魚の塩辛といったものだが、そのまま食べるほか、調味料としても使われる。

* かに肉入り包み揚げ (トオツ ボ ビヤ)

豚挽き肉、かに肉、えび、野菜などの、たっぶりの具を春巻ききの皮で包んで揚げたボリュームのある一品。

* あずきのデザート (ナム ワン ドウ デン)

あずきをもち米と一緒に甘く煮た、日本のおしるこにも似たデザート。もとは中国から伝わったものだが、ココナッツミルクを加えるのがラオス。

る。ところが、実際はそうでもない。

建設が決まったものの、予定していた資金の20パーセントしか集まっていないのだ。あてにしていた世界銀行やアジア開発銀行、それに日本政府は、融資に対して今のところことごとく「ノー」である。環境や経済性に問題があると言う。今や建設の目処は立っていない。「金が集まらなかったら、計画は御破算だよ。」ラオス政府の関係者はそうぼやく。

「まあ、ダムの計画が潰れれば村人の生活は守られるのだから、それでいいじゃないか。」などと呑気なことを言っている場合では無い。ダム建設を前提に森林は次々に伐採され、日本や韓国などに輸出されているのだ。このままでは、ダムは出来ずに結局村人の森が失われるだけということになってしまう。同じケースは南部でも起きている。ダム建設の資金が集まらないうちから伐採が行われ、日本に輸出しているのだ。村人と森の生活が壊されても、言論の自由がない、教育の行き届いていないこの国では、正面から反対の声を出すことはできない。

ラオスから森がなくなったら……

隣国タイのように、食べられなくなった農民が都市のスラムに流れ、農村は換金作物のための借金が膨らみ、少女が身売りをする……。

もちろん、そうなるとは限らない。しかし、そうならないと言い切れないのも事実だ。

「やっぱりラオスがいい」そんなラオス人の声を聞くと、一層そんな思いにかられるのである。



ナムウィン第2水力発電ダムの予定地周辺の伐採現場。伐採されているのはメルクシ松。

連絡先：Satoru Matsumoto

C/O JVC Laos, P. O. Box 2940
Vientiane, Lao P. D. R.

世界の各地及び日本各地からのレポートをお待ちしています。あなたの周りにある様々な知らせたい事柄をぜひ広く紹介して下さい。

国際交流の在り方について(講演)

II. 市民としての国際交流

上智大学法学部教授

猪口 邦子

高校時代の留学体験

さて、次に市民的交流の方についてですが、これはまさにすべての人がその努力次第で色々な創意工夫ができると思います。私は、高校時代にAFSというアメリカの高校生との交換留学組織を通じて、一年間アメリカでホームステイをさせていただいたことがありました。まだ、17歳かその位であった私を暖かく家庭に受け入れ、学校に行かせ、家族同様に勉強もみてくれたし、様々な家族の活動全てに参加させてくれたし、そのように私を一年間育ててくれたその家庭の交流の尊さというものは、もう言い尽くすことができません。

戦争の相手国「日本」から来た留学生

一年間お世話になって、もうこれでお別れという最後の時に、アメリカの母は、初めてこういうことを私に言ったんです。「実は、あなたが日本人であると知ったときに、私は仰天した。本当に驚き、どうしようかと戸惑った。今だから言えるけれど、実はそうだったのよ。だけど、本当にあなたを引き受けて良かったわ。」それは、アメリカの、まだ外国人もたくさんはいない本当に純朴なアメリカのニューイングランドの町で、日本人

といえば、この前、戦争をした相手の国からの子ということになります。そういう子がこの町に来るのは初めてですので、町の人達から「そんな、日本からの子を預かって良いのか、とさんざん言われた。」というんですね。私は戦後生まれの世代ですが、連綿と続く歴史の感情というものは、人が表現しなくてもその社会の中には流れているものなのだということを悟りました。しかし、その家庭のお母さんとお父さんは、町の色々な人々の所に私を紹介してくれて、色々なパーティにも連れて行ってくれました。ですから、私も友達をたくさん作ることができました。そのうちに、「邦子というのは、ごく普通の非常に良い女の子だから会ってみるといいよ。」と皆が言ってくれるようになりました。ついにはその町で色々な催しがあるたびに、日本舞踊などを披露し、最後には「ひっぱりだこ」と自分で言うのも何ですけれども、そんなふうな立場にもなっていました。

お母さんが最後の日にすべてを私に言ってくれて、「最初はすごく反発があったけれども、あなたがそういうことをまるで知らないかのように明るく振る舞ってくれて(これに関しては、私は非常に恥ずかしかったのですが)、皆はすっかりあなたのことを受け入れる気持ちになっていったのよ。あなたを色々な所に呼んでみたら、あなたは

皆と英語で積極的にしゃべってくれるし、皆がうれしいと言ってくれるようになったので、私は本当に救われました。」というふにお母さんが言ってくれました。一握りでも開明的に新しい時代を開こうという人がいるとき、その町全体の意識を変えることができたんだ、というふうに知りました。

アメリカの母の平和への思い

二、三年前に、その母が亡くなったときに、その町の新聞をお父さんが送ってくれたのですが、それによると、その日、町の広場では国旗を半旗にし、彼女の死を皆で悼んだということが書かれていました。その時私は、アメリカの母親が、若いときワシントンで何をしていたかということ、初めて知ったんです。彼女は、実は大変な才媛で、特に言語関係に優れていたのです。連合軍の太平洋戦線における暗号の解読の仕事をしていたということを知りました。彼女は、もちろんそのことは一言も私に言わず、その後戦争が終わってからは、そのことには全く関係なく、ただの一人の市民として暮らしていました。

その後私は、国際政治を志すことに決め、「アメリカに留学します。」と手紙に書きました。後に結婚し、その結婚した相手も国際政治学者なのですが、ともにハーバードに留学中、その家庭を家族で訪問したりして、ずっと交流を続けていま

した。その中で、その母親は「あなたが国際政治学を研究し、専門にしてくれたということで、私はどれほど嬉しいかわからない。あなたの専門としているのは、特に国際関係の中でも平和研究だと聞いている。平和の問題というのを積極的に考える職業についてくれて、私はこれほど嬉しいことはない。」と何度も何度も言ってくれたんですね。私は、その母が亡くなったときに、どうして、私が国際政治、中でも平和研究を専攻したということ、なぜこれほど喜んでくれたのかということが、初めて分かったんです。父も、手紙に「初めて明かすけれども、邦子が平和の問題に取り組むようになってくれて、自分の人生としても一つの大きな結論を得た。」というふうに書いてくれました。

つまり色々な歴史の重さというものを知りながら、しかし交流しているときにはそのようなことを一瞬も顔に出すこともなく、非常に穏やかに快活に、典型的なアメリカの良き家庭婦人として、新しい時代はやはり平和でなければならないという思い入れを込めて、その母は私に接してくれました。これは、一つの小さな国際交流の事例ですが、私にとっても、また私の今の家族にとっても、非常に重い国際交流の出発点で、交流の本質についてまさに教えられた局面であったわけですね。

市民的交流のポイント

そういうことを申し上げた上で、私は市民的交流のポイントといいますか、考え方というのを幾つかかまとめてみたいと思います。

1. 歴史を踏まえる

まず一つは、今の事例からもお分かり頂けるとおり、歴史をしっかりと踏まえるということが重要です。歴史は知らなければならない。日本の場合、アジアに対する歴史の負債があります。そのことはしっかりと知らなければならない。日常的にいつも触れるわけではないけれども、知っている人と知らない人では、やはり態度が違うということがあります。ですから、世界史は世界の全ての市民で共有しなければならない、ということだと思います。

2. 表現すべきこととすべきでないことの区別

それから二番目には、その歴史の重さというのは知った上で、しかしそれを全ては口に出さないでいく、つまり、表現すべきことと表現すべきでないこととの区別というものも、すごく重要だと思います。

3. Agree to disagree

それから三番目には、市民的交流としては、ある種の楽観主義というのが重要ではないかと、私はいつも思います。あまりつきつめて考え過ぎても、お互い色々な違いがあるのは当然ですから、それを思い悩んでも、ある意味で仕方がないわけで「違うことを知る」“agree to disagree”のよう

な、そういう楽観性も非常に重要だと思います。

4. 良き質問者になる

それから四番目としては、文化の違いに対して積極的な好奇心を持つということが重要ではないか、またそれは礼儀ではないかと思います。特に他国に行ったときには、その国の文化について積極的な探究者であってほしいと思います。ただ何となく、「ああ、この国違うわ。」という感じで通り過ぎてしまうような態度というのは失礼だと思うんですね。私は国際交流の一つの出発点というのは、良き質問者になれるか、ということだと思います。色々知らないことがたくさんあるわけですから、その説明の機会を相手に与えるということです。良い質問ができる人はたくさんを学ぶと思います。そして良い質問をされたときには、つまり自分の文化について説明する機会を与えられたときには、人は非常に嬉しいのではないかと思います。

私はアメリカの家庭に引き取ってもらった時には、まだ17歳の本当に好奇心旺盛な少女でしたから、もう何でも質問を浴びせかけていたんだそうです。でも、その家族はそのことをいつも褒めてくれました。「邦子はいつもたくさんの質問があって、私たちはそれがとっても楽しい。」と言ってくれました。日本の基準からしますと、よく喋る人というのはあまり良くなって、言葉数が多い人というのは、文化的にはよろしくないと言われています。しかし、そのアメリカの父母は、「あなたはいつも非常に良い質問をたくさん持っていて、私たちはあなたの質問を聞きながら、アメリカに

ついて改めて考えるのよ。」というふうに言ってくれました。子どもというのは、いつも質問がたくさんあるんですね。国際交流のある種の出発点というのは、そういう子どものような好奇心を別の文化の中で持つ若さがあるか、心の若さがあるかどうか、ということではないかと思います。だから皆さんも、良き質問者になってみてはいかがでしょうか。

5. 論理性と優しさ

それから、次に、五番目になるとと思いますが、もう一つ私が申し上げたいことは、色々文化的な違いがあるときに、人間であるが故に渡り合えるというか、共有できるものというのがあると思います。それは何だろうか。例えば、教育も違う、ユーモアのセンスも違う、考え方ももちろん違う、言葉も違う、立ち居振る舞いも違う、もう全てが違う。そういうときに、人間が人間であるが故に共有できて通じ合うことができるものが、二つあると私は思います。一つは論理性、もう一つは優しさ、ということです。

まず論理性。ロジカルに何かを表現するという能力です。論理というのは、人間だけが持つもので、動物には無いものですね。どんなに言葉が下手であっても、どんなにブローケン・イングリッシュであっても、言っていることに論理性があって、一つひとつ積み上げていく話し方をすれば、人は必ず聞いてくれる、というふうに私は自分の経験から思いました。もし、その論理の組み立て方が相手の文化とはちょっと違っていても、その違いは理解してもらえし、その違いを指摘し合

うという出発点を得ることができます。何かを感情的にだけ表現すると、何の出発点にもならないということです。ですから、論理的に自分の考えを展開できる能力は、国際交流において、非常に重要ではないか。

自分の文化を説明するときも、なぜそうになっているのかと、自国の歴史はちゃんと勉強しなくてはなりません。先程、世界史を共有しなくてはならないと言いましたが、その前に日本人であれば国史である日本史はしっかりとマスターしなくてはならない。宗教的な問題でも、あるいはどうして日本の住宅は貧困かとか、どうして受験戦争は大変なのか、という現在の社会問題であっても、伝統文化から現在の問題に至るまで、何らかの論理的な説明を自分なりに持っているという知的水準が絶対必要だと思います。これはべつに、すごくたくさん勉強しなければならないということではなくて、そういう知的関心のある市民になっているかどうか、ということだと思います。

それからもう一つは、優しさです。文化が違うと優しさの表現も違います。しかし、もしもその表現の仕方が間違っていたとしても、それは許してもらえる、というところがあると思います。それでも心は通じると思いますがね。人間も動物もお互いに優しいところはあるかもしれませんが、積極的に優しさを表明するというのは、やはり人間が人間であるが故の一つの文化であると思います。論理性、優しさというこの二つは、どんなに言語が違っていても、文化が違っていても、何か非常に国際通用性のある要素であると思います。

(以下次号に続く)

各地の活動紹介

今号は、宮城青年国際交流機構の菊地喜正会長の紹介により、宮城県内の青年団体に構成されている連携組織についてお伝えします。

ヤングパワー、社会活動を考える

宮城県青年会議会長 木村 正樹

宮城県内の、各種の全県的な活動をしている青年団体を集めて、昭和41年1月に「宮城県青年会議」が結成されてから、来年度（平成7年）で結成30周年の節目を迎えます。この間、多くの青年たちが青年会議の事業に携わってきました。

「青年会議」結成の目的は、各種青年団体の連絡調整機関としての役割と青年層の声を社会に向かってアピールすること、そして、青年たちの手による国際交流事業の推進などがあげられます。

〔構成〕

17団体により構成されており、加盟団体は大きく3つの分野に分けることができます。ひとつは地域を主体とする団体、青年団や4Hクラブなどです。ふたつめが職域を主体とする団体、一次産業や商工業の団体・組合の青年部で、農協青年部や商工会青年部などがこれにあたります。そしてもうひとつが、国や県の国際交流事業の事後活動団体である宮城青年国際交流機構や青年の船友の会などです。全加盟団体の人員は、合計すると約2万人の青年が参加していることとなります。まさに宮城県の青年を代表する組織といえます。



「青年の翼」 デラウェア州にて挨拶をする木村会長

〔活動〕

次の事業を行いながら活動をすすめています。

*「青少年健全育成青年キャラバン隊」

青少年健全育成事業として、キャラバン隊を組織し、宮城県内各地の市町村長の訪問や街頭啓発を行って、青少年の健全育成の啓蒙につとめています。

*「青年会議」

青年の声を県政に反映させることを目的に、毎年開催しています。加盟団体より議員を推薦していただき、模擬議会形式で勉強会をすすめ、最後に県当局の方々をお呼びして県政への提言を行っています。この議会から「宮城県青年の船」事業や県の行う人材育成事業などが生まれています。

*「宮城県青年の翼」

発足時より国際交流活動として、毎年、海外研修の一環で行っています。これは少人数（10～15名）の団員により、企画の段階から参加していた

だき、手作りの国際交流事業を目指すものです。この事業をきっかけとして訪問先の受入れ団体との相互交流に発展させていくことも事業の目的の一つです。昨年と今年、アメリカ合衆国デラウェア州へ訪問しました。デラウェア州と宮城県は、現在、友好提携を結ぶべく交渉を続けています。青年会議としても、民間の立場からデラウェア州の青年たちとの相互交流を願って、その調査をも兼ねた訪問を行いました。

* 広報誌の発行と連絡会議

加盟各団体の連絡調整を目的とした、広報誌の発行や理事会（理事は加盟団体の長）の開催をとおして、それぞれの団体のネットワークを広めていけるような取り組みを行っています。また、青年会議加盟以外の県内の青年団体との交渉を広げながら、青年団体の社会的立場の強化をめざしてPR活動をしています。

近年は、国際交流事業への取り組みが盛んに行われるようになり、青年会議や加盟団体においても、海外の青年招へい事業の地方受入れへの協力や県内在住の外国人や留学生・研修生との交流プログラムが、多く行われるようになりました。今後は、このような交流事業を、単にイベントに終わらせることがないような取り組み方が問われてきているように思います。青年会議としても加盟団体の協力を得ながら、新しいプログラムを通して、参加した青年たちが交流を持った留学生や在県の外国人の人達と、プログラムが終了してからもそれぞれが独自に交流を続けられるような、交流プログラムを考えているところです。

しかし、昨今、青少年団体を取り巻く社会環境は悪くなる一方です。加盟団体でも加入者の減少や、事業への参加の際の休暇取得の難しさなど、多くの問題を抱えながら活動している団体がほとんどです。しかし、社会活動に興味を持ち、参加を希望しながら活動できないでいる青年たちもいます。青年会議としては、このような青年たちが地域のなかに埋もれてしまうことのないよう、参加への障害を一つでも取り除いていくために、社会に対してアピールしていくことが、現在の我々のなすべき課題であると考えています。



「青年の翼」 ニューヨーク市国連ビル前にて

〈「宮城県青年会議」連絡先〉

所在地： ☎983 宮城県仙台市宮城野区幸町4-5-1

宮城県青年会館内

電話： 022 (293) 4631

交流の花開く～インドネシア編～

第5回沖縄県青年の翼

インドネシアのジャカルタ空港。沖縄から、11時間、三つの飛行機を乗り継いで到着した。出迎えの、懐かしい顔に大きく手を振る。

この旅は、沖縄県 IYEO (後援: 総務庁、沖縄県) 主催により、9月22日から27日のインドネシア4泊、シンガポール1泊の日程である。参加者は、知念正沖縄県 IYEO 会長ほか公募による計20名。(財) 青少年国際交流推進センターのコーディネートによるもので、プログラムは受入れ団体の SSEAYP International Indonesia (東南アジア青年の船インドネシア同窓会) による。

二日目は、スワヨス・アディ教育文化省青年局長を表敬訪問。「インドネシアでも、おしんは大変人気がありますよ。」と気さくに語る、3年間日本に滞在されたことがある局長のあいさつで、すっかり和やかな雰囲気になり、自己紹介と記念品贈呈(琉球人形)に続いて記念撮影。ここでお菓子と「飲料水」のもてなしを受けた。ここでは水は貴重なのである。

インドネシアの首都ジャカルタは、人口300万人を越える大都市。メインストリートには銀行や大手企業の近代的な高い建物が立ち並ぶ。お金はRp(ルピア)。千Rpが約50円。屋台の店で青いマンゴーを買う。キロ当たり100円。安い!

三日目、今年の「東南アジア青年の船」に参加する研修中の青年たちと交流。彼らは、皆、とても人なつっこくて陽気でエネルギッシュである。これって、私たち沖縄人の形容詞だよ。同じア

ジアの仲間なんだな。あ。

いよいよ、ホストファミリーと対面。期待と不安を胸に、ホストファミリーと連れ立っていく。

翌日、団員たちが戻ってきた。皆、顔が輝いている。成功だ! お世話になったホストファミリーと SSEAYP のメンバーたちと別れの宴。ご当地の華やかな孔雀踊り、団員の空手演舞、そして沖縄の「稲しり節」など。女子団員は浴衣に着替え宴に花を添えた。

旅の良さは、人との心のふれあいにある。

「イチャリバ、チョーデー」(出会えば、みんな兄弟になる)。沖縄の言い古された言葉が、浮かぶ。インドネシアの人々だけでなく、夜毎、杯を交わした素敵な仲間たち。この出会いを、一期一会として大切にしていきたい。お世話になった皆さん、トゥリマカシー(ありがとう)!

(當銘 孝枝)

木曜定例会について

毎週木曜日に県の青少年課で集まっています。毎週ということで必ずしも多勢集まることはありませんが、誰かいるという事で行きやすいと思います。議決事項がある時は、役員その他に招集をかけます。青少年課へ通うということは、IYEO のメンバーや課の人と情報交換がたやすく出来るということであり、お互いの協力を十分な理解のもとに得ることができます。

(座間味良枝)

世界の国際交流活動

世界には、ユニークな国際交流活動が数多く行われています。このコーナーでは、IYEOのメンバーからの情報によって様々な活動を紹介していきます。今回は、「第18回東南アジア青年の船」の参加者である中島文彦さんからの推薦により、学生の活動組織として世界に大きなネットワークを持つAIESECについて紹介します。

AIESEC (アイセック)

AIESECとは、フランス語で Association Internationale des Science Economiques et Commerciales (日本名=国際経済商学学生協会)の略称です。設立当初は、経済・商学関係の学生で構成されたが、現在では様々な社会問題に興味を持った学生により構成されており、学生自身によって自主的に運営されている非営利の国際学生団体です。現在では、世界81か国の750以上の大学、5万人以上の学生が参加しており、日本でも60大学、1,500名にのぼる学生が参加している世界最大の学生団体です。

我々は、今後、世界は地域における市民社会の形成に向かわなければいけないと考え、そのためには、将来社会を形成していくであろう若者の意識喚起と、同時にそのチャンスが保証される社会が必要であると考えています。

このために、AIESECは様々な活動を行っていますが、世界共通で取り組んでいる事業の一つに「海外企業研修交換事業」というものがあります。これは、海外の企業に学生が研修を受けに行くもので、実務体験の中で学生のうちに実社会に触れる機会を得るとともに、その国での生活を通して他国の文化を知るということを目的にしています。

もう一つは、グローバル・テーマ事業といいまして、世界的に共通なテーマの下にセミナーや会議を行い、それを全て集約し、学生として社会に提言をするというものです。

この他にも、地域問題についての講演会や企業とのコンタクトトークスなど、市民社会に向けた様々な活動に取り組んでいます。

(秋田 哲宏)



アイセック(国際経済商学学生協会)

日本委員会事務所

〒150

東京都渋谷区恵比寿1-15-9

シルク恵比寿201

TEL 03-3444-3110

FAX 03-3444-3157

お知らせコーナー

〈海外派遣青年のつどい・ブロック大会〉

近畿ブロック：1995年2月11日・12日（京都）

北信越ブロック：1995年3月11日・12日（福井）

関東ブロック：1995年2月18日・19日（群馬）

*IYEOの皆様には、近日中に案内状が到着しますので、お友達と共に是非ご参加下さい。

〈「第7回世界青年の船」出航のお知らせ〉

1995年1月19日（木）17時 東京晴海埠頭L岸壁

*参加国：オーストラリア、エクアドル共和国、フィジー共和国、メキシコ共和国、ブラジル連邦共和国、カナダ、コロンビア共和国、ジャマイカ、ニュー・ジーランド、ソロモン諸島、アメリカ合衆国、ヴェネズエラ共和国、日本（13か国）

帰航予定日：3月20日（月）14時 東京晴海埠頭

〈「第21回東南アジア青年の船」無事に帰航〉

1994年11月14日（月）帰航し、国内プログラムの（東京での全体プログラムのほかに、地方旅行として北海道・群馬・石川・愛知・香川・高知の各

編集後記

明けましておめでとうございます！

見て楽しい、読んでおもしろい、気軽に「こくさいこうりゅう、してみようかな」と思わせる紙面

*本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

県と大阪市でお世話になりました。) 終了後、11月22日、アセアン青年が帰国しました。

〈「にっぽん丸」船上パーティ1月18日開催〉

案内状希望者は、センターへFAXにてご連絡を

同窓会たより

〈第12回青年の船、15周年のつどい〉

青春の熱い思いを乗せて共に過ごした55日間！その思いを忘れずに集まった良き仲間達。短い時間なれど、思い出を語りあたたかき心にふれた。

日程：1994年8月20・21日（於：新潟市）



にしたいと思いつつ……うーん、難しいなあー。みなさん、ご協力を！ 小さい記事也大歓迎。

(めぐ/Y/O/K/R/モン)

MACROCOSM (マクロコズム) 1月号 Vol.2 1995年1月発行 (隔月発行)

編集：マクロコズム編集委員会

発行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

編集協力：総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定価：195円 (本体189円)

印刷所：絢文社

TEL 03-3959-3960

I Y E O 沖縄 — インドネシア派遣 — (本文 18 ページ)



◀ 教育文化省青年局長に表敬訪問。

右から金城ブロック幹事、青年局長、桜井団員、インドネシア同窓会のリノ会長。



市場の風景▶

▶ ホストファミリーと昼食
(郊外のレストランにて)



◀ ホストファミリーの子供達と鶴を折る。



▼ フェアウエルパーティーにて





The First East Asian Young Leaders Congress (第1回東アジア青年指導者会議)

1994年8月2日～8月9日〔マレーシア……クアラルンプール・ランカウィ島〕

マレーシアのマハティール首相により提唱され、統一マレー国民党（マレーシア与党）の主催により、東アジア13か国の青年指導者代表を招いて「第1回東アジア青年指導者会議」が開催された。

日本からは、超党派で10名の国会議員が派遣されるとともに、SSEAYP Internationalのつながりにより、別の枠組みで日本青年国際交流機構からも6名（別記）が参加した。

また、ASEANの各国代表団には東南アジア青年の船の既参加青年が正式代表として数多く参加しており、事業の成果を人材育成の面から実感することができた。

〔 IYEO 代表団：森田 正英（団長）
大八木繁則／渡部 和恵／浜砂 千夏
岡本 浩一／磯部 聡子 〕

*13か国代表によるセレモニー

ブルネイ・カンボディア・中国・朝鮮民主主義人民共和国・インドネシア・日本・ラオス・マレーシア・フィリピン・大韓民国・シンガポール・タイ・ベトナム

